生徒にとって効果的で分かりやすい評価をめざして

斉藤亜希子
英語科　端崎　圭一
山岸　律子

1．テーマ設定の理由

平成23年度の英語科のテーマは，「生徒にとって効果的で分かりやすい評価をめざして」とした。「効果的で」は形成的評価を意識して，「分かりやすい」は明示的なルーブリック（＝評価指標）を意識して選んだ言葉である。以下，形成的評価と明示的なルーブリックを軸にテーマ設定の理由を述べてみたい。

平成１２年１２月４日の教育課程審議会からの答申「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」において，目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）の重要性が謳われたことによって，学校現場の評価のあり方が，相対評価から絶対評価へと大きく移行した。あれから１０年以上経過して，新学習指導要領による教育課程が本格実施を迎えようとしている現在，もう一度，そのあり方の見直しが求められている。ただし，それは絶対評価を新たな評価に転換するということではなく，評価が真に生徒の指導に生かされるよう工夫・改善をする（＝指導と評価の一体化）という意味での見直しである。

では，英語科におけるここ１０年の評価の実態はどうであったのか。結論を言えば，教育活動の最終時点で，生徒がどの程度，学習目標を達成したかを判断する総括的評価の比重がかなり大きく，指導の過程で学習状況を確認する形成的評価や生徒が学習の前提となる知識をどの程度獲得しているかを調べる診断的評価の比重は小さかったと言える。特に，「学習の方法や方略の改善，ひいては学習水準の向上に及ぼす影響（森・秋田 p. 137)」が大きいと言われる形成的な評価については，計画性に乏しく場当たり的であったと言わざるを得ない。

例えば，Show & Tell のようなスピーチ活動において，生徒に原稿を書かせ暗唱させ練習を積ませ発表させる。この一連の流れの中で教師が形成的評価をする場面として，原稿添削を行うことはあっても，時数の都合上，個々の話し方や発音についての形成的評価が不十分のまま発表本番に入り，そこで総括的評価を行ってきた。「話すこと」に重きを置いている活動であるにも関わらずである。また，音読テストなどにおいても，授業中にイントネーションや強弱などに関して一斉指導をして，あとは家庭などで量的な練習を積ませ，テスト本番を迎えさせる。この流れにおいてもスピーチ活動同様に，個々の形成的評価に時間をかけられないのが実情であった。もちろん，それぞれ練習の場面において，机間指導中に教師が気づいたり生徒からの求めに応じたりして，形成的評価を行ってはいるものの生徒全般に行き届いている評価とは言いがたかった。そこで，こうした反省や平成 24 年度から英語の授業時数が週 4 時間になることを受けて，形成的評価を授業にもっと取り入れる改善策を平成23年度の実践で模索していくこととした。

ところで，本校では平成 22 年度から「生きる力」の核となる思考力・判断力・表現力などを育むため，全教科の学習で言語活動を組み込んできているが，英語科ではインフォメーションギャップを利用した従来型の言語活動に加え，「リアルな文脈（あるいはシミュレーションの文脈）において，知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような課題（西

岡・田中 p.8)」，すなわち，パフォーマンス課題にも取り組んできている。

平成 21 年度の授業実践で生徒にパフォーマンス課題に取り組ませた際，自己評価や相互評価をするのにルーブリック（＝評価指標）を事前に示すことで，目標を明確にしてパフォーマンスの量と質の向上を図ったことがある。ルーブリックの作成にあたっては，生徒に分かる具体的な表記を心がけたが，課題への取り組みの様子を観察していると功を奏した感がある。この時，『学習者にとって理解可能な言葉で，現在の発達段階について診断的情報が得られるような評価（長沼 p.35)』の指標が必要であると強く感じた。教師が成績をまとめるときに使用する評価の言葉は，必ずしも生徒に理解できるとは限らない。

以上のように，これまでの評価のあり方の反省と平成 21 年度のルーブリックを使った授業実践を踏まえて英語科のテーマを設定し，平成 23 年度は，生徒への評価の還元方法を模索することとした。

2．言語活動について

本校の平成 23 年度の研究テーマは，「言語活動に着目した評価のあり方」を副題としている。様々な学習活動から「言語活動」を取り上げて研究を進めていく理由は，今回の学習指導要領の改訂において，生徒の思考力，判断力，表現力等をはぐくむために各教科の指導に当たって言語活動の充実を図ることが求められているからにほかならない。英語科においては，改訂前から様々な言語活動に取り組んできたが，本研究を通して，それらの言語活動を見直し再構築できる絶好の機会であるととらえている。

従来の言語活動の見直し再構築のためには，文科省から示された「言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】(2011)」を大きな指針としていきたい。この中には，「事実等を正確に理解し，他者に的確に分かりやすく伝えること」「考えを伝え合うことで，自分の考えや集団の考えを発展させる」「実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う」など数多くの重要なポイントが列挙されているが，英語科では，具体的な場面や状況の中での言語活動であったり，本物の教材を使用した言語活動であったり，生徒の関心を少しでも惹きこむような言語活動を工夫していきたいと考えている。そうすることが，英語の実践的な運用能力を養うことに通じるとも考える。慶應義塾大学教授の田中茂範氏は，「そうだったのか★英文法（田中 p.64)」の中で次のように述べている。

（関係代名詞 who の使い方を，オバマ大統領の演説，すなわち，本物の英文の中で読み取らせることを示した上で）

学校の英語はどうも白けてしまう。この「白け」が英語嫌いを作る原因でもあるんじゃないかと思うんですね。「白け」とは artificial ということです。その反対の「本物」は authentic です。本物の力は人を引きつけるんだろうと思います。

また，いくら具体的な場面や状況の中での言語活動であっても，そこで生徒が使う英語が単なるサンプルから選んで組み立てられるだけのものではなく，生徒の「本物」の思いが反映する言語活動にもなるように工夫をしていきたい。

３．１年生の実践

１年生では，文法事項を全て学習し終わった後のパフォーマンステストとして，絵を見て情報を英語で伝え，英語を聞いた生徒がその絵を描く活動をした。同じ活動を２度行い，その中で形成的評価を行い，最後に総括的評価を行った。活動で使用した絵は，濱中直宏氏（２００４）の上越教育大学修士論文「日本人中学生同士の，発達段階に基づくペアによるインタラクションが，疑問形習得に与える効果」からのものである。

（１）表現活動の指導と評価の方法

① １時間目（説明及び練習活動）

ア．活動の説明をする。

イ．ルーブリックを渡し，評価のA，B，Cの基準を明らかにする。

ウ．４人（生徒a，b，c，d）１グループを作る。

エ．生徒aは教師から与えられた絵を英語で２分間説明する。

オ．生徒bはaの言った英文を聞いて，紙に絵を描く。

カ．生徒cとdは生徒aとbの様子をカメラの動画機能を使って撮影する。

キ．生徒aとbが絵の内容を伝える生徒と描く生徒の役割を交代する。

name

中学1年　英語スピーキング能力　ルーブリック

観点／段階	C（改善が必要）	B（満足できる）	A（よい）	S（すばらしい）
コミュニケーション	相手の話または状況を理解して返答できない。	相手の話または状況を理解して返答できる(50%)こともある。	相手の話または状況を理解してだいたい(50%～80%)返答できる	相手の話または状況を理解していつでも(80%以上)返答できる
話し続ける力	単語がいつも1つだけ1つの単語を繰り返す	ためらいながらも，制限時間の30%を話すことができる	話の途中で止まることはあっても，制限時間の30～50%を話すことができる	相手の言ったことを繰り返したり質問をしたりして，制限時間の50%以上を話すことができる
正確さ	文法や発音のまちがいが多い	文法や発音の間違いが半分ある(50%正確)	文法や発音の間違いはあるが大部分は正確である(50～80%正確)	文法や発音の間違いがほとんどない(80%以上正確)
ボキャブラリー	習った単語をほとんど使えない	習った単語を50%から80%使うことができる	習った単語を80%以上使って表現できる	習った単語はもちろん，習っていない単語も使って表現できる
内容	十分な情報がない	相手に内容の50%を伝えられる	相手に内容の50%から80%を伝えられる	相手に内容の80%以上を伝えられる

1回目

	友達（　　）からの評価	友達（　　）からの評価	友達（　　）からの評価	自己評価
コミュニケーション	A	B	B	A
量	B	A	B	B
正確さ	A	B	A	B
ボキャブラリー	A	A	A	A
内容	A	A	A	A
コメント	伝える努力、てたね。分かりやすかったかな？	なにをしていたかわかりやすかった。	ちょっと細部まで考えてて良かったと思う。	もう少し量を増やすれば◎

2回目

	友達（　　）からの評価	友達（　　）からの評価	友達（　　）からの評価	自己評価
コミュニケーション	A	A	A	A
量	A	A	A	A
正確さ	A	A	A	B
ボキャブラリー	B	A	A	A
内容	A	A	B	A
コメント	位置や物、人、数とかはっきりしてるから予想しやすかった	その人が何をしているのかはっきりしてるから伝わってくる	量が多かったけど、内容が少し分かりにくかったけど、でもすごくよい発音でした。	前よりも、かなりよくなったよね。まだ正確さが…。

ク．活動の後に，生徒aとbの動画を見る。

ケ．グループの中でaとbの評価（相互評価）をする。ただし，描いている時の評価ではなく，話している時の評価をする。

コ．生徒aとbは自己評価もする。

サ．生徒cとdがaとbと交替し，上記のエ～コを行う。生徒a，b，c，dはそれぞれ違う絵の説明をする。

ス．生徒に「使える表現」や「言いたかった表現」のレポートを宿題にする。

② ２時間目（使える表現の確認と練習活動）

ア．次の時間にパフォーマンステストをすることを伝える。

イ．パフォーマンステストではルーブリックの５観点のうち「内容」の観点だけを評価すると伝える。

ウ．前時の「使える表現」や「言いたかった表現」の確認をする。

（例）A boy is fishing.　A girl is reading a book.　I can see two birds on the chair.

エ．場所を表わす表現の確認をする。

（例）in the center,　on the right,　on the upper right,　next to her

オ．今までに見たことのない絵を使って教師が英語で伝え（モデル），生徒は絵を描く。

カ．１時間目のウ～サ：絵を英語で伝える活動と自己評価と相互評価をする。伝える時間は１分３０秒。

キ．全体で多くの生徒が間違っていた表現の現在進行形や複数形を使える表現としてフィードバックする。絵は１時間目の４種類の絵を使用する。

③ ３時間目（パフォーマンステスト）

ク．パフォーマンステストではルーブリックの内容の所だけを評価することと評価の仕方を確認する。

絵の情報を０～２つ言える：C，３つ：B，４～５：A，５つ以上：S

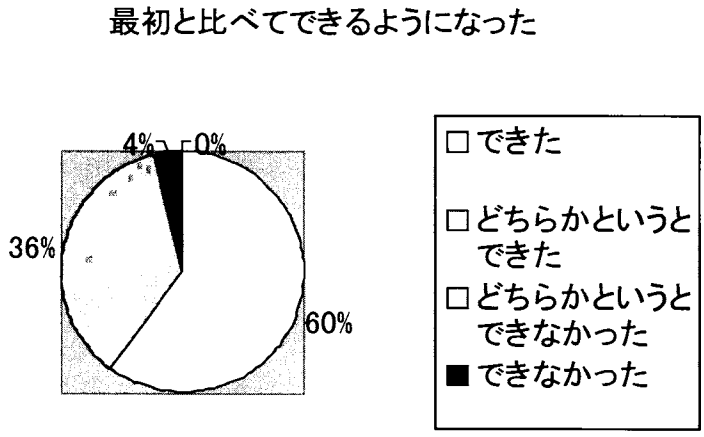
ケ．生徒 a，b，c，d が順番に絵の内容を伝える活動をし，その様子をカメラの動画で撮影する。教師は後でその動画を見て総括的評価を出す。絵は今までに見たことのないものを使用する。自己評価と相互評価はしないが，英語を話している生徒以外は情報がいくつ伝わったかの確認をし，メモをとる。

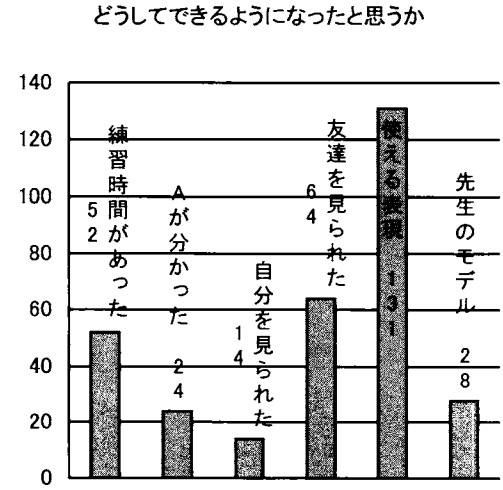
コ．教師はパフォーマンステストの最中に生徒の様子を観察する中で気づいた，多くの生徒がする間違いを確認しておく。

サ．全体で正しい表現を確認する。

パフォーマンステスト後に，今回のパフォーマンステストでは絵の内容を伝えるという目的の達成を第１に考えたため，情報が伝わるかどうかのみを評価した。全員のパフォーマンステスト後に，正確性のために全体で現在進行形の be 動詞が欠落していることや複数形の場合の be 動詞の形などの文法の確認をした。

（２）表現活動中の評価に関するアンケート調査結果と考察





この活動では，最初に多くを説明せずに課題を与え取り組んだ後，どの表現が効果的かを全体で確認しもう一度同じ課題に取り組んだ後，パフォーマンステストをしたことになる。活動後のアンケー

トを見ると最初と比べてこの活動が「できた」と「どちらかというとできた」と答えた生徒を合わせると９７％となっている。また，どうしてできるようになったかという質問には，アンケートに答えた１５８人中１３１人が「使える表現を学ぶことができたから」と答えている。筆記テストの結果がよくできている生徒でも，この活動の１回目の時にはなかなか言葉がでてこなかった。しかしながら，どんな場合にどんな表現が必要なのかを練習を重ねるうちに，楽しみながら現在進行形と場所を表わす表現を少しずつ身に付けていった。知識を教えるだけでなく，実際に使う経験が多く必要だと改めて感じた。

次にアンケートで多かった答えは「友達が話している様子を見られたから」となっている。私達は個人の練習の時間を多くとろうとするが，実は友人の様子を見ることで学ぶことがとても多いと生徒達は実感していることが分かった。

また，活動の始めに１年生のスピーキングの目標としてルーブリックを提示した。生徒には目標はＡと伝えた。活動後のアンケートには９７％の生徒がルーブリックを見ると目標が分かると答えた。９５％の生徒はルーブリックを使うことで今の自分の力を把握することができると答えた。ルーブリックに対する生徒の意見に次の様なものがあった。

（肯定的な意見）

- 最初は全然できなかったけど，回数を重ねていくごとに成長していく様子が自分で分かり，やる気につながったと思う。
- ルーブリックを使うと，頭で考えていることが具体化できて，どんな目標をたててそれをどう果たしていくかや，ふり返って自分はどうだったのか，これからどうしていけばいいのかなどがわかったのでよかったです。
- ルーブリックを使うことで自分のできていない所やできている所が分かった。
- 自分のできない所を友達から教えてもらい，だんだん，パフォーマンスが上手になった気がする。
- ルーブリックはどのようにすればＡ評価がもらえるのかが分かってよかった。
- ルーブリックで自分を評価してもらうことで，ちゃんとできていたなと思ってもみんなから見たら違っていたり，アドバイスされることで，これから直していかないといけないことが分かったのでよかったです。
- ルーブリックがあるのとないのでは全然違うとおもいました。その理由はＳやＡをとろうとやる気がでるからです。

（否定的な意見）

- 基準がわかりにくい。シビアな人はシビアだし，やさしい人はやさしすぎる。
- ８０％など％がよく分からない。具体的ではないから，少し分かりにくいと思った。でも，相手にどう伝わっているのかが分かった。

１回目と２回目の練習では生徒は５つの観点について自己評価と相互評価をしたが，「内容」の観点に重点をあてた。それはパフォーマンステストの実用性の面を考えたからである。「内容」の観点で情報を伝える力を評価することを優先したのは，１年生は英語に親しむように正確性よりも情報を伝える積極性を育てたいと思ったからである。１つの観点に絞ってフィードバックすることで，多くの生徒がそれに集中して練習し，力を伸ばすことができたと感じたようだった。

ルーブリックを使用する際には，生徒にとって分かりやすい目標としてルーブリックの作成をした

ものの，実際できあがったものを見ると文言が生徒には分かりにくくあまり使いたがらないのではと懸念した。しかしながら，ルーブリックを使うと生徒は何を目標にすればよいかが把握でき，学習意欲が増した様だ。中でも，ルーブリックの％の表記を伝えた情報の数によって評価する（０～２つ：C，３つ：B，４～５：A，５つ以上：S）と説明したことは生徒にとって分かりやすい目標になったようだ。また，Aだけでなく S を明記したことは更に生徒の学習への意欲向上に効果的だった様だ。

また，活動の前に生徒にモデルを提示することや生徒が何を分かっていないかを認識させることでその後の生徒の取り組み方が違ってくることを強く感じた。

（３）今後の課題

平成２３年度は年度末に１度だけの使用になったが，今回使用したルーブリックは中学校１年の英語のスピーキングの最終目標として作成した。これは常に同じルーブリックを使用することで，生徒がパフォーマンス評価ごとに自分の変容を感じ，それが学習意欲につながって欲しいと考えたからである。ただ，パフォーマンステストごとに別のルーブリックを用いた方がより適切で生徒の動機付けに効果的であるか更に研究が必要である。

今回のルーブリックの観点はコミュニケーション，話し続ける力，正確さ，ボキャブラリー，内容の５つとした。これはスピーキングに必要な要素としてこの５つを観点とした。生徒の力を伸ばすために何をルーブリックの観点にすべきか，更に研究をする必要がある。

また，生徒のアンケートから「％などの表現が分かりにくい」という意見もあり，今回の様に％表記をした１年を通したルーブリックを使用するのであれば，パフォーマンステストの課題によって，表現を生徒が理解しやすいように言い換える必要がある。

今回は年度末で時間に余裕のない中研究を進めたため，生徒が実際に自分を撮影した映像をゆっくり見ることができなかった。来年度からは授業時間が週４時間になることから，今回よりは少し余裕を持って活動できるのではないかと期待すると共に，パフォーマンステストとそのための練習の時間は週４時間の授業に適した活動だと考える。また，生徒が実際に英語を使えるようにするには，そのパフォーマンスを評価し指導するためのルーブリックも必要だろう。

４．２年生の実践

外国語表現の能力を養う目的で，２年生では不定詞を活用した自己表現活動に取り組ませたが，本稿ではその指導のあり方とその評価方法，およびその考察を述べていく。

（１）表現活動の指導と評価の方法

①不定詞を活用した言語活動

言語材料として不定詞を扱う教科書の単元では，登場人物がそれぞれ自分たちの将来について語っている。そこで，この単元の最終活動として「自分の将来の計画や夢について人にわかりやすく話をする」というパフォーマンス課題を生徒に提示して取り組ませた。この課題は，生徒にとって，決して架空の問題ではなく近い未来に必ずやって来る，避けては通れない問題と直結している。その意味で，先に述べた「本物」の思いが反映する課題として適切なものであると考えた。

②自分の将来計画や夢について書く指導

「話すこと」が最終課題であるが，まず，自分の将来計画や夢について自分の考えをまとめ，文にすることを指導した。その際，以下の３つのステップを踏むように指導した。また，辞書を用いることは推奨したが，新出語の乱用は聞き手の理解を妨げるので避けるようにアドバイスをした。（右図は，使用したワークシート）

・まず，結論を述べる。
・結論について，２～３つの理由を述べる。
・将来計画実現に向けてすることを述べる。

この３つのステップは，教科書本文で登場人物が述べているスピーチの構成である。日本人の話や作文は結論が見えず何を言いたいのか分かりづらいと聞くことがあるが，このことを踏まえると，英作文の指導では，結論→理由の順序を指導としていくことが肝要であると考えた。

自分の将来計画や夢について未定であるという生徒には，架空の計画や夢を無理やり書かせることはしないで，計画や夢がないことや，なぜ今それがないのかを伝えるように指導をした。なぜならば，架空の内容は作文の練習にはなっても「本物」から離れると判断したからである。

③「わかりやすく」話す指導とルーブリックの提示

文が完成した後，いよいよ最終課題の「話すこと」に進むのであるが，本活動の生徒の目標は「わかりやすく話をする」である。教師にとっては「わかりやすく」が評価の観点，すなわち，評価規準になっている。具体的には，①聞き手を意識しながら②正しい発音

自分の将来の計画や夢について書こう

※，現在，計画や夢がない人は，ないことを伝えよう。※，将来の計画や夢とは…つきたい職業やしたいこと

☆Program 6 の最終目標は，「自分の将来の計画や夢について人にわかりやすく話をする」です。それができるようになるために，まず，自分の将来の計画や夢について書いてみましょう。

【伝える３つのステップ】
1．まず，結論を述べよう（＝つきたい職業やしたいことを先に述べよう）。
2．次に，結論について，２，３の理由を述べよう（＝なぜその職業につきたいのか，なぜそれをしたいのかを述べよう）。
3．実現させるために，今そしてこれから，何をするつもりか，何をしたらよいのか，何をすべきかを述べよう。

1．Look at the following 3 examples and ask Mr. Hashizaki if you have questions.

	ポピュラー歌手になる夢の人	おもちゃ店を持ちたい人	将来計画がない人
	Hi, everyone.	Hi, everyone.	Hi, everyone.
Step 1:	In the future I want to be a pop singer and have a concert.	In the future I'd like to have my own toy shop.	I have no plans for the future.
	Do you know why?	Do you know why?	Do you know why?
Step 2:	I like music. I like to sing pop songs. [redacted] I respect Michel Jackson. I want to be a superstar like him.	When I was a small boy, my parents gave me a lot of toys and I often played with them. It was great [redacted] I want to give many children the same kind of fun.	The future is too [redacted] for me. I [redacted] it now.
Step 3:	*But* to be a pop singer, I have to practice a lot. I'll do my best. Please come to my concert some day.	*But* to have my own toy shop, I have a lot of things to learn. I'll do my best. Please come to my shop with your children some day.	*But* I want to enjoy my life in the future. So I think I should learn a lot of things at school.
	Thank you.	Thank you.	Thank you.

2．Write your own plan for the future.

	Hi, everyone.
Step 1:	In the future I want to help many people.
	Do you know why?
Step 2:	Because I am always helped by many people. For example, my family, my friends and my favorite singer.
Step 3:	But to be useful to many people, I have to ~~practice~~ do a lot of things. I'll do my best. Please encourage me.
	Thank you.

自分の将来の計画や夢について人に話す練習をしよう

２年＿＿組＿＿番　名前＿＿＿＿＿＿＿＿

1．Program 6 の最終目標は，「自分の将来の計画や夢について人にわかりやすく話をする」です。そこで，今日の授業は，前回の授業で書いた作文をもとに，話す練習をしましょう。

ところで，「わかりやすく」伝えるために気をつけなければならないことは何でしょうか。いくつか考えられますが，中学校３年間で身につけてほしいことは，以下の４つです。
①「話しぶり」…聞き手が自分の話をわかっているかどうかを確かめながら話をする。具体的には，（　　）を見ながら話をすることが大切です。簡単なジェスチャーを入れることも大切です。
②「発音」…英語で話すので，発音や（　　）が正確であることが大切です。
③「内容」…テーマに沿って適切な内容になっていることが大切です。
④「わかりやすさ」…文が文法的に正しく聞き手に理解してもらえることが大切です。

今回の活動では，すでに原稿を書いているので，③と④はクリアしていますから，①と②を目標に練習していきます。下の表を参考にしながら，「素晴らしい」を目指してください。

	でき具合
A：素晴らしい	①メモに全く頼らないで，常に聞き手とアイコンタクトをとりながら話すことができる。 ②発音，アクセントに限り文来くきである。
B：かなりよい	①メモは２，３回見る程度で，聞き手とアイコンタクトをとりながら話すことができる。 ②発音やアクセントで，２，３誤りがある程度で，ほとんど気にならない。
C：よい	①メモは頻繁に見るけれど，話す時は，聞き手とアイコンタクトをとりながら話すことができる。 ②発音やアクセントが，半分程度，誤りが，または，日本語風になっている。
D：努力が必要	①メモを半分以上見続けて，話している。 ②発音やアクセントのセ割近くが誤りか，または，日本語風になっている。
E：まったくできない	①メモを見ても，話がとぎれとぎれで読かない。 ②発音やアクセントが，日本語と変わらない。

※どんなに上手でも，声が聞こえないのは「D」または「E」になります。

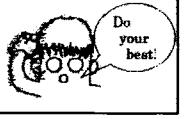
2．上の表を見てわかるように，今回は，メモを持ってもかまいません。ただし，あくまでメモなので，ヒントとなる語を書く程度にとどめてください。

【例】前回のプリントのポピュラー歌手になる夢の人のメモ
（英）pop singer / a concert // like / respect / superstar // practice a lot / best / come
（日）つきたい職業 // 理由 / 音楽好き / 尊敬する人 // やらねばならぬこと / お願い

3．練習の流れ
①メモを考えよう。メモは，このあとの練習のでき具合で，どんどん変更してください。（３分）
②自己練習１に入ります。途中，先生に発音等の質問をしたり，アドバイスをもらいに来たりしてください。（１０分）
③グループで聞き合い，相互評価を行います。一人の話が終わったら，その人の学習カードにでき具合を書いてあげ，気づいた発音等の誤りを書いてあげよう。（１０分）
④自己練習２に入ります。途中，友達から相互評価で指摘された発音等の誤りを先生に確認したり，アドバイスをもらいに来たりしてください。（５分）
⑤グループでビデオ撮影をおこないます。時間の都合上，撮影は一人１回のみです。（８分）
⑥全員が撮り終わったら，ファイルを再生し，自分の映像を見て自己評価をします。（５分）
⑦練習ファイル提出します。（４分）全員の映像を見て，次回の授業までに先生がアドバイスを考えてきます。
※ビデオ撮影の注意点…ビデオ撮影はグループで協力して行ってください。全員が交代でだれかの映像を撮影してください。カメラと被写体の距離は，液晶画面に胸から頭のてっぺんが入る程度にしましょう。話している人は，途中，間違えたら，そこから言い直して続けてください。最初からのやり直しはできません。

…… 切り取り線（スピーチ本番まで切り取らないこと）……

スピーチ用メモ欄



で話すことができる，の２つである。

さて，「わかりやすく」話すという時，生徒にとって，どのように話せば相手に「わかりやすい」状態であるのかの具体的な目安が必要であると考えた。その目安があれば，練習中，今自分が完成までどの段階にあるのかを把握しやすいし励みにもなる。そこで，その目安，すなわち，ルーブリック（＝評価指標）を「でき具合」という表現に変えて一覧表形式（前ページの右下図が，使用したワークシート）で示し，それを参照させながら，練習に取り組ませた。

自分の将来の計画や夢について友達に伝えよう（学習カード）

2年＿

1．先生への質問や先生からのアドバイスを書こう。

2．お互いの将来の計画や夢を聞き合い，わかりやすい話し方のでき具合を評価し合おう。

	班員名1 〔 さん 〕	班員名2 〔 さん 〕	班員名3 〔 さん 〕
話しぶり	A Ⓑ C D E	A Ⓑ C D E	A Ⓑ C D E
発　音	A Ⓑ C D E	A Ⓑ C D E	Ⓐ B C D E
気づいた発音等の誤り（いくつでも）	どこも間違っていませんでした。	速わず話せばいいと感じました。	目を見て話すと、もっとよくなると思います

3．自分のビデオ映像を見て自己評価をし，最終発表に向けてどんな点に気をつけていきたいかを文章にまとめておこう。

		気をつけたい点
話しぶり	A B C Ⓓ E	緊張しすぎてつまってばかりいた。
発　音	A B Ⓒ D E	medicineの発音。
気づいた発音等の誤り（いくつでも）	medicine（メディシン）になっている。	pharmacistの発音。

4．先生からのアドバイスを貼りつけ参考にしよう。

出だしの調子が終わりまで続くといいですね。Futureのfの発音を意識しよう。Medicineは「メディスン」という感じで発音しよう。

5．発表をメモをとりながら聞こう。聞き取れない場合があったら，発表後に質問をして確認しよう。

	班員名1 〔 〕	班員名2 〔 〕	班員名3 〔 〕	班員名4 〔 〕
つきたい職業／したいこと	内科医	バレリーナ	テレビ局	
理　由（一つだけ書く）	看護師になりたいから	踊りが好きだから。	老人と仕事をしたいから。	
これからすること／しなければならないこと等（一つだけ書く）	英語のことを学ぶこと。	英語を勉強する	英語のことを学ぶ。	

※Excuse me. I have a / two / three question(s).

・What do you want to be in the future?

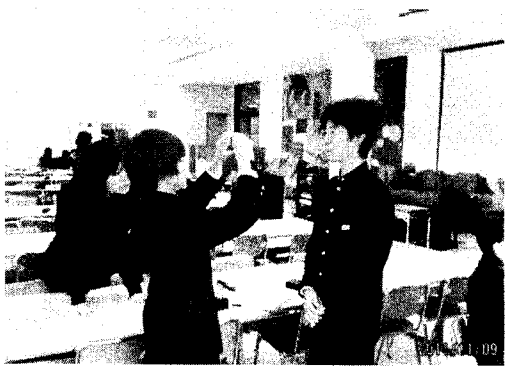
・Why do you want to be ?

・What do you have to do for your dream?

検印

④練習中の形成的評価

練習中は，３方向からの形成的評価を組み込んだ。一つ目は，グループ内（４人班）での相互評価。二つ目はビデオを見ての自己評価。三つ目は，教師からの評価である。それぞれ，ルーブリックに基づいてＡ～Ｅで評価をしながら，具体的な気づきやアドバイスも書くようにした。（上図が，使用したワークシート）



⑤動画による評価

相互評価は，比較的相手の話を冷静に聞きながらリアルタイムで評価をすることができるが，自己評価は発表後に自分の姿を思い出すことで行うので，記憶に頼ることが多い。過度の緊張状態であれば，記憶がなく自己評価どころではないだろう。そこで，動画で自分のパフォーマンスを見させることで，メタ認知を補うようにさせ，自己評価に役立てる試みをした。グループに１台動画の撮れるデジタルカメラを渡して利用させた。また，次回の授業までに，教師もこの動画を見てルーブリックをもとに評価をし，それをフィードバックすることができた。この教師の評価は，生徒の最終発表の改善に資することができると考えた。

⑥課題最終発表

課題の最終発表は，クラス全員の前での発表ではなく，グループ間同士（２グループ計８名）の発表をした。こうした形式を取ったのは，緊張感を和らげようというねらいがあったからである。デジタルカメラでの撮影はこの時も行うが，これは，教師が行う

総括的評価に用いるためのものである。発表では，聞き手はメモを取りながら話を聞き，聞き取れなかったら，発表者にたずねるようにさせた。

(2)表現活動中の評価に関するアンケート調査結果と考察

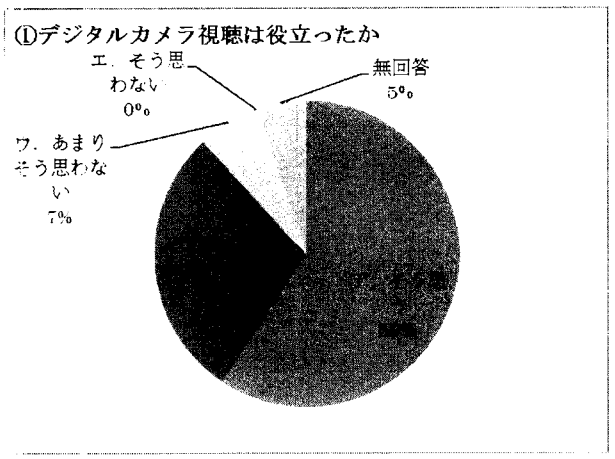
本活動の評価に関することがらについて，生徒がどのように感じ考えているのかについて以下の4つの項目でアンケート調査を実施した。(回答数は152名)

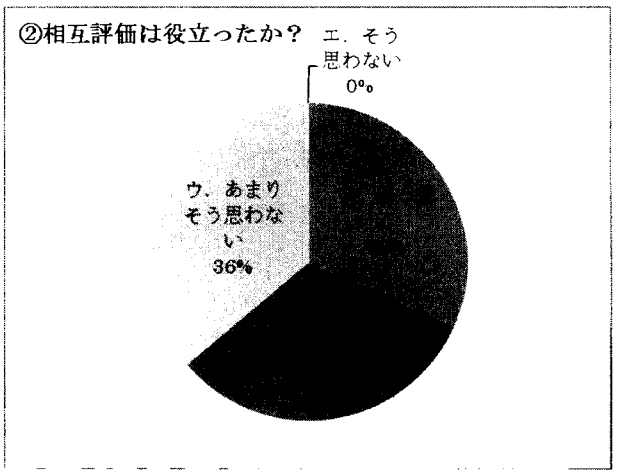
①デジタルカメラの視聴は，自分の本番のスピーチの改善に役立ったと思いますか。

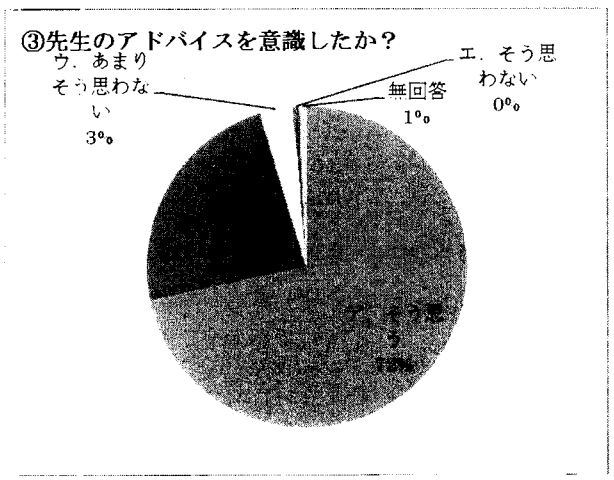
②相互評価は，自分のスピーチの改善に役立ったと思いますか。

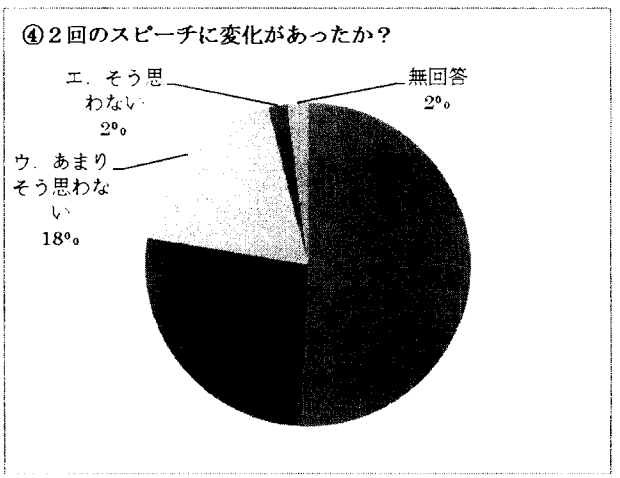
③自分の本番のスピーチの時に先生のアドバイスを意識しましたか。

④練習スピーチと本番スピーチの間に何か変化がありましたか。









①の項目に関して，「そう思う」「どちらかというとそう思う」という肯定的な意見が88%を占めたことは，デジタルカメラによる自己評価が受け入れられたと判断したい。そして，具体的にどんな点で役立てようとしたかについて聞いてみると，発音・アクセント・イントネーションが51名，アイコンタクトが49名，次いで，声の大きさ29名となった。この結果は先に示した「わかりやすさ」を生徒が意識できていることの表れと連動していることになる。

②の項目に関しては，肯定的な意見が64%を占めているものの，「あまりそう思わない」

という意見が36%を占めていることを見逃せない。理由は問わなかったので推測するしかないが，評価する生徒の英語力の問題や見られることを嫌う生徒の意識がこの回答率の高さにつながっているようである。

③の項目に関しては，肯定的な意見が96%も占めている。教師への依存度をはかり知ることができると同時に，教師の評価が生徒に与える影響力の大きさを知ることができる。

④の項目に関しては，約80%の生徒が形成的評価をはさんで自分のスピーチに何らかの変化があったと判断している。そして，具体的にどんな変化があったかについて聞いてみると，発音・アクセント・イントネーションが52名，流暢さが30名，次いで，アイコンタクトが20名となった。「話すこと」の活動なので紙面で生徒の変容の具合を伝えられないが，確かに，流暢さやアイコンタクトに関しては改善の様子が見られた。しかしながら，発音・アクセント・イントネーションに関して言うと，生徒が感じているほど十分な変化はないと思われる。

（３）表現活動の成果と課題

①成果

・ルーブリックを示しながら指導することは，生徒にとって，どこに気をつけながら活動をすればよいのかが明確になって，学習を促進する可能性が高いと思われる。

・「話すこと」の活動においては，自分の姿を視聴することが有効な手段となりうることがわかった。

・昨年度にルーブリックによる評価を試みた時には盛り込む項目を６つにした。しかし，項目数が多すぎて評価しきれないという反省があった。そこで，平成２３年度は項目を２つにしたが，評価の焦点が絞られ生徒も教師も評価が容易であった。

・新学習指導要領では，英語は週４時間となった。本実践は，昨年度まだ週３時間の段階で，週４時間を想定して行った。週４時間であれば，動画を自分たちで撮影し自分の発表をその場で評価することや動画ファイルを教師がデータとして吸い上げてフィードバックする時間の確保はできると実感した。

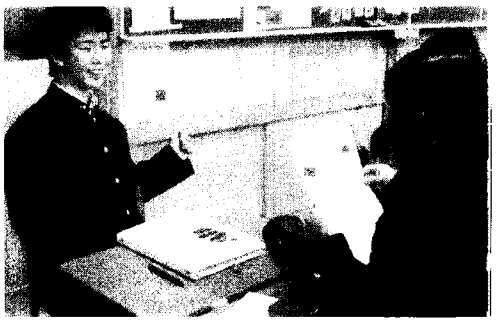
②課題

・アンケート結果が示すように，相互評価に課題が見られた。相互評価の観点に問題があったのか。評価をする生徒の人間関係など他の要素に問題があったのか。また，そもそも，相互評価はモニタリングされているという意識を高めるのに有効だとすれば，今回のようなやり方のままでよいのかもしれないなど，検討をする余地のあるところである。

・教師一人で生徒約１６０人の形成的評価を行い，それを一人ひとりにフィードバックした。それは，このような活動ではきめ細かな指導が有効であると考えたからである。しかしながら，平成23年11月に実施した中間意見交換会では，「抽出した生徒を取り上げ，その生徒の評価を他の生徒の前でフィードバックすることでも形成的評価として生徒のスピーチの質の向上に資するのではないか。そうでないと，教師の負担が過剰になるのではないか。」という指摘をいただいた。形成的評価においては，時間対効果を考慮する必要がありそうである。

5．３年生の実践

平成２３年度の英語科の研究テーマ「生徒にとって効果的で分かりやすい評価」とは，教師が単元のねらいとして明示するものと，それに対して学習者である生徒が目指すものとが一致し，ねらいの達成に向けて効果のあるものでなければならない。生徒自身が，どのようにできればよい評価が得られるかを熟知し，その練習の過程で，形成的評価をもとにフィードバックを行うことで，指導と評価の一体化につながるものと考える。



３年生は，関係代名詞を用いたタスク・ベースの言語活動を相互評価したものと，スピーチを発表するため自己評価および相互評価したものについて述べたい。

（１）表現活動の指導と評価の手順，評価の実際

①タスク･ベースの活動の評価

ア．評価の目的

ペアでタスクに取り組ませ，その言語の使用について，観察・評価を行う。これまで，いろいろな文法事項や言語形式をくり返し練習した後で，それらを使えそうなタスク･ベースの活動を行ってきた。生徒達は，それぞれの立場で言いたいことを伝えるだけでなく，相手の心を動かそうと意欲的に取り組む姿が見られた。具体的にはアイコンタクトやジェスチャーを使い，なんとか言葉をつないでいた。しかし同じ文のくり返し，単語のみの発話，命令文の多用が見られた。

正確な発音・文法やさまざまな表現も，コミュニケーションを支える大切なスキルであることを意識させるため，評価活動を行うことにした。

Welcome to Our High School! 評価表

役割 新入生 [redacted] 組 [redacted] 番 名前 [redacted]

表現活動の評価　他のペアの人につけてもらいましょう。

1回目	評価	2回目	評価
正確さ	A	正確さ	A
流ちょうさ	B	流ちょうさ	A

評価のめやす

		正確さ	流ちょうさ
A	Great!	・三人称単数や複数形の s，r，th，a などささいな間違いはあるものの，概ね発音に気をつけている。 ・文法・語いの間違いはほとんど見られない。	・ときどき必要な言葉を探すことがあるが，不自然なポーズは 1,2 回程度である。 ・あまり止まらず苦労なく幅広い表現を用いて話す。
B	Good!	・発音は日本語の読みになっているところがあるが，気をつけて発音しているところの方が多い。 ・文法・語いの間違いは 1,2 にとどまる。	・ときどき言葉を探すために止まることはある。 ・幅広い表現を用いるために努力しているし，全体的な意味を相手に伝えることができる。
C	You Can Do More!	・発音は日本語の読みになっているところが多い。 ・基本的に文法・語いの使い方が間違っている。	・長く不自然に止まることが多い。単語のみであったり，文が途切れる。 ・表現のパターンが決まっている。話すことをあきらめている。

ふり返り

・正確さ
文法は知っているものもあったから意外とできた。でも，とにかくことばわからなきゃ，と思ったから，とっさに文が作れなくなりそうだった。

・流ちょうさ
幅広い表現があまり使えなくて難しかった。
走るのが速いは，I run the fastest や I was the fastest runner はできた

・がんばったところ，難しかったところなど
とにかく話をつなげて，説明することをがんばった。
そのつなげるのが難しかった。

ア．手順

- ペアで異なるタスクのワークシートを読み，自分の立場を理解する。
- 活動の準備としてメモをとる。
- 全員で評価指標（＝ルーブリック）を読み，A～C の基準を確認する。
- ペア二組で１つのグループを作り，活動しているアをもう一方のペアが聞いて評価する。
- 活動するペアと評価するペアが交代する。

・メモの見直しをする。
・ペアの組み合わせを替え，同じことを再度行う。
・評価してもらったワークシートを返してもらい，お互いにアドバイスをして自分のふり返りを行う。

ウ．評価の実際

「話すこと」における「英語の音声の特徴をとらえ，正しく発音する」「自分の考えや気持ち，事実などを聞き手に正しく伝える」「つなぎ言葉を用いるなどの色々な工夫をして話を続ける」力を形成的評価をすることで指導につなげることを目的として，評価活動を行った。今回の授業では「正確さ」と「流暢さ」を評価した。それぞれ「発音」「文法・語い」と，「止まらず話す」「表現の豊かさ」について評価した。特に気をつけるべき点や評価の基準について，教師がルーブリックを用いて具体的に提示することが必要であった。生徒同士で評価を行うため，自分の判断が合っているか，ペアのパートナーと細かく相談する時間を持たせた。提示しなかった点は，今回は評価しなかった。

以上のことについての取り組みの様子を中間意見交換会で紹介した。参会者の方からは，「『正確さ』『流暢さ』という測りにくい観点において，評価に取り組むことは興味深い」とした上で，評価の基準を信頼のできるものにするために工夫が必要であることや，生徒達の様子が，実際にメモを見ながらの活動になっていることへの指摘を受けた。

②スピーチを発表するための評価

ア．評価の目的

３年生の最後に，お世話になった人への感謝の手紙 “Thank You Letter” に取り組ませた。ここではみんなの前で，どうしたら気持ちがこもった発表をすることができるかということを考え，そのための表現力を評価させた。感謝の言葉の言い方や，手紙の形式を前もって細かく指導し，生徒には今回の活動においては作文することよりも，気持ちを伝えることが大切である，ということを確認した。

Let's Speak Thank You Letter

Class [redacted] No. [redacted]

心をこめておれの手紙を読みましょう。どうしたら心をこめたことが伝わるかな。「相手の目を見る」「大きな声で」…。わかっちゃいるけど，自分が実際にどれくらいできているのかわからない。そこで，今回は自分の姿を冷静に見るために，お互いに録画をしてもらいます。

気をつける規準
・アイコンタクト（視線を上げる）をとりながら話す。
・気持ちが伝わるように話す。
・英語の発音に気をつけて話す。

評価の基準

	アイコンタクト	気持ちが伝わるか	英語の発音
A	スピーチの８割は視線をあげて話すことができ，ときどき色んな人と視線を合わすことができる。	Dearの後の名前がはっきり聞こえる。何に対して感謝しているか，思い出などちよくわかる。	意味のある文節で区切って読んでいる。r, l, th など特徴ある発音に気をつけて読んでいて，ネイティブの発音に近い。
B	スピーチの５割は視線を上げて，話すことができるが，後は原稿を見ている。	Dear の後の名前がはっきり聞こえるが，内容に関してはわからないところがある。	５割ぐらい意味のある文節で区切って読んでいる。r, l, th など発音ができていないことがある。
C	ほとんどが原稿を見たままで読んでいる。	誰に対して，何の感謝をしているかよくわからない。	Thank you が「サンキュー」になったり，日本語をそのままカタカナで読んでいるような不自然さがある。

同じグループの人と録画をし合い，後でチェックしてみましょう。

	アイコンタクト	気持ちが伝わるか	英語の発音
自分	B	A	C
	B	A	A
	B	A	A
	B	A	A

発表に向けて

「thoughtfulness」の発音を英語らしく
「ｆ」で切る

私の発表順は 9 番

発表を終えて

もうすこしアイコンタクトが上手にできたらよかったかなと思いました。少しでも [redacted] に感謝の気持ちが伝わっていたらいいなと思います。すごく恥ずかしかったですが…。面と向かってなかなか言えないので，今回言葉にすることができてよかったです。自分に言ってくれた発表をきくのは少し恥ずかしかったですが，すごくうれしかったです。家族や先生など，色々な人に向けたメッセージがありましたが，どれもあたたかかったです。

イ．手順

・“Thank You Letter”の例を読ませたり，感謝を述べた歌を聴いたりして気持ちを高める。
・感謝の言葉の言い方や手紙の型について基本的なことを知る。
・自分が手紙を書きたい人や，具体的なことについて考える。
・手紙を書いて提出し，教師に指導を受けたものを清書する。
・全員で評価指標を読み，A～C の基準を確認する。
・各自，読む練習をする。
・４人で一組作り，デジタルカメラを使って録画し合う。
・録画したものを見て，評価し合う。
・アドバイスの交換，発表に向けて自己評価を行う。
・全体の前で発表を行う。
・発表についてふり返りを行う。

ウ．評価の実際

国立教育政策研究所による「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料」では「話すこと」はそれぞれの観点において次のように示されている。

・(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)
「話すこと」の言語活動に積極的に取り組んでいる。
〈評価規準の設定例〉聞き手が理解しやすくなるように工夫している。
→どうすれば聞きやすいか。
・(外国語表現の能力)
自分の考えや気持ち，事実などを英語で正しく話すことができる。
・〈評価規準の設定例〉正しいイントネーション，区切りを用いて話すことができる。
聞き手を意識して，適切な音量や明瞭さで話すことができる。
・ →どうすれば聞き手を意識できるか。

以上のことから評価指標（＝ルーブリック）を「アイコンタクト」「気持ちが伝わるか」「英語の発音」という３つの観点で定めた。相互評価にすると，お互いにやや甘い評価になる傾向があるが，自分の姿を録画してそれを評価すると，冷静に見ることができるようになった。「発表に向けて」のふり返りと自己評価の欄には「早く読み過ぎない，ハッキリ言う」「目線を上げて大きな声でゆっくり話す」「丁寧に単語を言う」「できるだけ原稿を覚えてアイコンタクトをちゃんとする」「本番ではできるだけ色んな人と視線を合わせるように意識して発表する」など，より具体的な読み方を，生徒自身が意識することができた。

（２）成果と今後の課題

タスク・ベースの活動は，どちらかというとコミュニケーションへの関心・意欲・態度を重視していたため，多少の発音や文法的な間違いはよしとする傾向にあったのだが，意欲的な生徒達の姿を見ていて，もっと言語としての知識を深め，表現の能力を高める活動につなげることはできないかと思い，評価の活動を取り入れた。生徒自身が評価指標（＝ルーブリック）を理解し，自分は現段階でどこま

でできているかを知るため，発音や文法事項への意識が高まり，「もっと練習して上手くなりたい」という意欲を高めることができた。評価することで，生徒自身が自分の姿をふり返り，教師も次の指導の方法について考える。授業における形成的な評価は，生徒と教師の目標が同じ方向に向かっていくことにつながると感じた。

タスク・ベースの活動の評価では，生徒による相互評価のみを行ったため，評価が「合っているか不安」という言葉があった。また，生徒同士の遠慮があるためか，やや甘い評価をつけてしまう傾向がある。形成的評価は，お互いの力を伸ばすために客観的に，厳しめに判断することをくり返し指導していく必要がある。そのために，全体の前でいくつかのペアにパフォーマンスしたことについて評価したり，グループごとの評価・アドバイスの場に教師が加わるなどして，評価の信頼性を高めることが大切だと思う。

また，一組ごとに教師による具体的な形成的評価をすることで，生徒が次の活動につなげ，その上達した部分に焦点をあてて総括的評価をしていくことができる。

今回，スピーチを発表するための評価で取り入れたように録画をして記録を残すことは，くり返し見ることができる，生徒が客観性を高めることができる，という点で有効であった。

本稿では話すことの評価について述べてきたが，これまで，教科書本文の読み練習で相互評価の活動を入れた際，生徒達の練習への取り組み方が意欲的になり，発音・イントネーションなどを意識した読み方も良くなった。また，英作文を読んでお互いに評価し合うという活動も行った。具体的には「５Ｗ１Ｈをはっきりさせる」ことや，「気持ち」「これからしたいことがわかる」といった評価規準で，生徒が評価を行うことで，どのような文を書けば気持ちが伝わる文になるかがわかり，文の量も多くなった。

評価の役割は，評価することで，学習者の今の状態を知り，課題の達成に向けての指導に役立てることである。ルーブリック等で示される尺度の表現は，評価規準表等にある抽象的な表現を，明確で具体的かつ客観的に示すことであり，学習者である生徒自身が理解できるものである必要がある。

指導の際には，まずモデルを示すことが，より効果的であることがわかった。また，評価の規準や尺度は，教師が一方的に示すのではなく，生徒とのインタラクションの中から挙げていくように心がけたい。生徒が自分で考え，実際の活動の中から評価の指標を見いだしていくことが，学習意欲につながるものと考える。

新学習指導要領では，４技能それぞれの技能を様々な活動を通して関連づけていくこと（４技能の統合）が求められている。評価においても，ひとつの技能や観点においてだけではなく，その活動において目標とされる基準を達成するための合理的な尺度（＝ルーブリック）が必要であると考えられる。評価をすることで，生徒の考える力（思考力），見極める力（判断力），自己表現の力（表現力）を伸ばすという視点が大切である。平成２４年度より週４時間の授業時間が確保されることになったが，形成的評価を効果的に行い，生徒の力を伸ばしていきたい。

６．３学年を通した成果と課題

各学年，パフォーマンス課題やタスク・ベースの活動を通して形成的評価とルーブリックを軸に生徒にとって効果的で分かりやすい評価をめざして研究を進めたが，３つのことが見えてきた。

１つ目は，パフォーマンス課題やタスク・ベースの活動はとても時間がかかる活動だということである。これは，平成２４年度からの週４時間の授業時間で時間を確保していきたい。

２つ目は，３学年ともルーブリックの項目を絞って評価してきたことが，生徒には理解しやすく，教師には実用性が高いということである。今後にパフォーマンス課題またはタスク・ベースの活動のためにルーブリックを使用する際には是非活かしていきたい点である。

３つ目は，全学年においてルーブリックのような形で明示的に生徒に目標を示すことは，より高い目標のために意欲的に課題に取り組む動機付けとなることである。ただ，ルーブリックを使用する際に，より高い評価を得るために努力するというよりも，より高い目標に向かって努力することで外国語表現の能力が伸びることに重点をあてていきたい。

生徒にとって効果的で分かりやすい評価をめざし，これらの３つのことを今後の指導に活かしていきたい。

【参考文献】

2011　金沢大学附属中学校『研究紀要第５３号』
菅　正隆　2010　開隆堂　『日本人の英語力』
田中耕治編　2011　ミネルヴァ書房　『よくわかる教育評価第２版』
田中茂範　コスモピア　2011　『そうだったのか★英文法』
長沼君主　2011　大修館　『「誰のための評価か，何のための評価か」英語教育５』
西岡加名恵・田中耕治編　2009　学事出版　『「活用する力」を育てる授業と評価』
西　厳弘　明治図書出版　2010　『即興で話す英語力を鍛える！ワードカウンターを活用した驚異のスピーキング活動２２』
濱中直宏氏　2004 上越教育大学修士論文『日本人中学生同士の，発達段階に基づくペアによるインタラクションが，疑問形習得に与える効果』
松村昌紀　2009　大修館書店　『英語教育を知る５８の鍵』
森　敏昭・青木多寿子・淵上克義編　2010　ミネルヴァ書房　『よくわかる学校教育心理学』
森　敏昭・秋田喜代美編　2006　有斐閣　『教育心理学キーワード』
2011　文部科学省　言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】